

れていった。少年の痛みに向き合う社会の態度や姿勢・ケアとは何かを考えさせられる。この少年ドナー家族の「身体の一部だけでもどこかで生き続けている」と考えると、彼を失ったつらさや悲しみが少し救われるような気がする」は、ドナー家族自身の少年を失ったことに対するケアであるのと同時に、彼らを支える周辺の、お互いの痛みを和らげ合うケアなのであろうか。残されたドナー家族に対する「配慮や気遣い」のケアが、社会全体で行われているのであろうか。しかしこうした「配慮や気遣い」に基づくケアは、本来の弱者の痛みから目をそむけたうえでのケアであり、正当化することはできない。現代社会はいのちの本質を覆い隠す危機に直面しており、自他の痛みに気付かない社会である。私たちはみな、先端医療のシステムの中で弱者になりうる可能性をもつということを自覚せねばならず、自他ともにケアしていく社会の在り方が今必要である。限られた時間で移植を待つ移植でしか助からない患者も、自分の意思や感情を表現できない患者も、同じ重みのいのちをもっている。しかし、今回の法改正によって後者の弱者のいのちを奪う方向へと改悪された。「弱者同士の両方に気遣いをすべきとき、いろいろな要望を声高に吟じることができる待機患者と同様に、〈声にならない声〉をあげる末期患者の〈聴こえない声〉を聴こうとする社会の方が、実は優しい社会なのだ」（金森修「聴こえない声を聴く」小松美彦他編『いのちの選択——今、考えたい脳死・臓器移植』岩波書店、二〇一〇、六六頁）。痛みに鈍感な社会は危険な社会である。目に見えない他者・弱者の声を挙げていく社会は、いのちの本質を問う社会である。私

たちには「弱者の痛み」に耳を傾ける社会を形成していく努力や姿勢が必要である。

フランス・バイコンにみる

自然探求の宗教性

下 野 葉 月

フランス・バイコン（一五六―一六二六）の思想は主に近代科学の台頭や人間による自然の支配というコンテクストにおいて語られ、頻繁に「科学」と結びつけられる。しかし彼の言説をよく吟味すると、今まで「科学」として認識されてきた自然探求という行為が実のところ「宗教」でもあったことに気付かされる。

本発表ではバイコンが宗教改革後の世界でいかなる宗教観をもつに到ったのかを検討し、またどのように神学ではなく自然の哲学的探求に新たな宗教的可能性を見出すのかを明らかにする。彼は宗教改革によって齎された様々な争いに直面しながら青年期を過ごす。外交の訓練のために赴いたフランスはユグノー戦争の最中にあり、本国イングランドでは画一的な統制を強いる国教会と更なる宗教改革を求める清教徒の間でパンフレット論争等が繰り広げられていた。そうした状況を「宗教」の危機と捉えたバイコンは『英国国教会の論争について広く訴える』（一五八九）という作品の中で、論争に用いられた風刺や嘲笑という手段が「宗教」の尊厳を損なわせると批判し、本来

「宗教」がいかにあるべきかを示す。それは「穏やかでゆつくりとした助言や勧告」を促すべきものであった。

そのような宗教観は、彼の関心を神学論争の根拠となる啓示ではなく、自然に基く哲学、とりわけ自然哲学へと向かわせる。ペイコンは啓示が記された聖書と並んで神が残したもう一冊の書物である自然にこそ新たな可能性があり、神の被造物である自然の成り立ちを遡及することによって第一原因である神へと辿りつくのだと考える。

ペイコンが自然の哲学的探求に見出した宗教性を検討するために、彼の死後出版された小説『ニュー・アトランティス』(一六二六)を分析する。物語の中心となる「サロモンの家」別名「六日創造学院」という自然研究・宗教機関は、とりわけペイコンの「宗教」と「科学」を理解する上で重要な素材となる。そこでは自然に対する讃美歌が歌われ、祈りが捧げられていると同時に、動植物の生態や人間の病、錬金術、光学、音響など多岐にわたる自然研究が組織的に行なわれている。つまり「宗教」的活動と「科学」的活動が同時に行なわれている。ペイコンのそうした組織的な研究の構想は後世において実際に王立協会の設立(一六六〇)を促したがため、一般的には「科学」と結びつけられがちであるが、そうした「科学」の読み込みは、自然科学が確立された後、後世の人間が付したものであるため、そこに自然科学の類似を見出すだけでは彼の思想を十分に理解したとは言えない。

そこで、彼の宗教観に立ち戻り「サロモンの家」で行なわれている自然研究の活動を再考すると、それが「宗教」として成

立しうることが明らかになる。前述したように宗教改革の影響を受けて育ったペイコンは改革派つまり清教徒よりの教育を受けて育った。そのため偶像崇拜を嫌い、儀礼ではなく日々の労働を介した贖いの可能性を重視する。そうしたカルヴァン主義的な要請は自然をめぐる考えにも反映され、彼は自然を眺めてその美しさを讃美するという行為は、「神の尊厳」を傷つけるのだと考える。自然崇拜は偶像崇拜と同じく「額に汗をしてパンを得る」という「神の勅令」に反したものであり、自然の哲学的且つ組織的な探求こそが彼の宗教的要請に応えた行為であった。

ペイコンが自然の探求に見出した宗教的な可能性には宗教改革の影響が刻まれており、偶像崇拜のように自然を外面的に崇拜するといったものではない。彼が考えた可能性とはカルヴァン主義的な理念にもとづく労働を介したものであり、自然探求という理性を活かした哲学的な行いこそがそうした労働の理念に合致していたのではないだろうか。

ウィリアム・ジェイムズにおける科学と宗教

林 研

ウィリアム・ジェイムズは、生涯にわたって宗教に強い関心を持ち、また科学者の自覚を持ち続けた思想家である。ジェイムズは科学と宗教をどちらも網羅的でなく排他的でもないとしており、両者の対話の立場を取っていると考えられる。では彼